

第2部 千曲川とナイル ― 文化の創造と継承

ナイル川をめぐる周辺地域との交流 ― カルガ・オアシス、アル・ザイヤン遺跡を例として ―

大城道則

□はじめに

どうもみなさんこんにちは。よろしくお願ひします。大城と申します。普段は東京の駒澤大学というところで歴史学、西洋史を教えています。出身はさきほどの河合先生のおひざもとであります兵庫県の尼崎市です。実は駒澤大学は1年生の研修旅行というものを毎年長野で行なっています。その件で来週は松代です。毎週こちらに来ていることとなります。駒澤大学には上田市出身の先生がいます。昨日、千曲市で講演をするという話をしたんです。すると、上田駅の近くに力屋というそばやがあるから、ぜひ行きなさいと言われてとりあえず行ってきたんですが、そのせいで少し遅れてしまいました。量がすごくて食べきれず、急いでタクシーで会場まで参りました。

そういうことでまた来週こちらにお世話になります。私は古代エジプト史が専門です。普段は大学で教えてるんですが、それ以外に大学では、夏休み、冬休み、春休みとありますが、研究活動と入試関連の仕事などの学内の用事に追われております。「大学の先生はいいですね」と言われることもあります。いろいろと忙しいんですよ。ただサラリーマンになった同級生を見てますと、とてもじゃないけど、平和な生活を大学でしてるなと思ってしまいます。

夏休みは2カ月あります。夏は毎年シリアに発掘に行ってます。この10年ほどですがシリアにパルミラというローマ時代の遺跡があるのですが、そこで調査をさせていただいています。砂漠の真ん中です。オアシスです。それ以外はポンペイで遺跡を調査したり、今日これからお話ししますが、

エジプトで去年から新しいプロジェクトで発掘することになりました。そのようなわけで今回は日本とアフリカ、千曲川とナイル川というダイナミックな主題のもとで話をさせていただきます。そして現在私が考えていることについてみなさんの前でお話をさせていただきます。40分ほどですが、よろしくお願ひいたします。

□エジプトの生命線―ナイル川

今も昔もエジプト人にとってナイル川は生命線です。ほとんどのエジプト人たちの生活の場は、ナイル川の周辺地域に限定されていたといってもいいのではないかと考えています。人々はナイル川のほとりで、生まれまして、そこで生活して、そして死んでいったわけです。古代エジプト人たちは、そのナイル川から魚とか貝類などの糧を得て、そしてナイル川の増水後に露れる肥沃な土壌に育つ農作物を得ることにより、暮らしていたということになります。ですからナイル川は古代エジプト人にとって、生きていくために必ず必要な食糧を供給してくれる源だったわけですね。また、エジプト人にとってナイル川は、先ほどの話にもありましたように、僕の話聞くにあたって非常に助かる話が屋形先生からありましたが、南北に6700キロメートルに広がっています。ですからナイル川は南北に長く広がる国土を縦方向に結んで、そして船を利用して物資を運べる、ある意味ハイウェイのような重要な役割を果たしているわけですね。

□古代エジプトにおける船の重要性

ナイル川の更なる重要性は本日取り上げます西方砂漠にあります。エジプトの地図ではこのあたりに西方砂漠のカルガ・オアシスがあります。この地域の隆盛やその役割について考える際にさらにナイル川の重要性が明らかになるのではないかと考えております。それではまず、最初にナイル川における川と船の重要性を、エジプトの壁画や土器の文様から少し確認しておきたいと思っております。

画面に映っているものですね、初めてごらんになった人もたくさんいらっしゃると思いますが、これは壁画であります。エジプトの古代都市ヒエラコンポリスで発見されたお墓の壁画です。第100号墓の彩色壁画と呼ばれているものです。当然これは修復したものです。分かりやすいようにですね。紀元前3300年ごろにつくられたんじゃないかと言われております。いろいろと説はありますが、だいたいその前後につくられたと言われております。

皆さんがこの壁画を見た際に目に最初に飛び込んでくるものは、このブーメラン型をした船ですね。全部で6艘あり、白いものが五つ、黒いものが一つの船が目飛び込んでくると思います。白い船をアップにしますと、こんな感じで上に船室があります。黒い船は船尾があがってますね。合計6艘の船がこの壁画の大部分を占めています。そして画面は大きく二つの色に分かれています。下の方の黒っぽい色はおそらく濃い青色のダークブルーの変色したようなものだと考えられます。おそらく船が上で川が下で、これはナイル川を表現しているんだろうと考えることができますね。船は他の要素、例えば人とか動物とかと比べますと大々的に扱われていることからその壁画のメインとして重要性が明らかになるわけですね。古代エジプト美術の特徴の一つとして重要な人物や重要なものは、他に比べて明らかに大きく描くというそういう法則があります。その点からも船が重要であることが言えます。

次の例は、土器ですね。彩文土器です。このような彩文土器は、王のような当時の有力者のお墓に副葬品として埋葬されたものであります。いろいろな分類はあるのですが、だいたい紀元前3500～3100年につくられたと言われるものです。この時代の紋様のモチーフとして最も人気があったの

は、船であったということですね。当時の土器というものは高級品の一つと言ってよいほどの価値のあるものでした。その表面に船が描かれていることで、古代エジプトにおける船の重要性を確認するのに十分じゃないかと、そのように思います。また、王あるいは王に準ずる王族とかのレベルの人々の墓に副葬品として埋葬されたことから、エジプトの王権と船との関係を、もしかしたら想定できるのではないかと考えています。

次の絵はちょっと変わっていますが、レリーフを書き写したものです。プントレリーフと呼ばれるものの一部であります。

エジプトのルクソールにデル・エル・バハリという場所がありまして、そこにハトシェプスト女王という人が建てた葬祭殿があるんですが、よくテレビとかで出てきますね。エジプトのツアーとかになりますと必ず行くようなところで。ちょっと昔の話ですがここで何人か、銃の乱射を受けて亡くなった方がいますが、そういう場所なので今では警備がきびしくなって、安全で大観光地となっております。

この葬祭殿の壁に先ほどの船がたくさん描かれたレリーフがあるわけです。このレリーフは当時のエジプト人によって、プントとよばれていた国との国家規模の交易の様を描いたものだと言われております。この国はどこにあるか分からないと言われておりますが、今の研究段階では、現在のエリトリアあたりかソマリアあたりかなという人もいます。そういうちょっと行きづらい、ふつうの旅行者じゃいけないような場所にあったと言われる古代の国家であります。その国との交易の様を描いたものがこの壁画です。

このなかで巨大なマストを備えた船が描かれています。おそらく、外洋船、海用のものだと考えられるわけですが、これらの船と同じ規模の船がナイル川を使った交易に使用されていた可能性が考えられるわけです。エジプト王を中心として行なわれていました国家事業に用いられた船は、これくらいすばらしい洗練されたものだったと理解できるわけです。先ほど見た壁画や土器に描かれた船の時代から、1000年くらいの間にエジプトの造船技術はナイル川によって鍛えられ、磨かれて発展していったということがわかると思います。

ついでに古代エジプトの神々と船との関係につ

いて少し触れておかなければならないと思います。例えば収穫祭の一つとしてオペト祭というものがあります。こういう祭りとか儀式におきましては、神像が聖なる船に乗せられて神官たちによって担がれて神殿と神殿の間を練り歩き、運ばれるという祭りが行なわれていました。また太陽神とか、あるいは亡くなったファラオ、エジプト王が「太陽の船」という船に乗って旅をするのだというふうにも考えられてきました。このことから、現実世界以外においても船は重要なものだと考えられていたことが分かったと思います。

以上のようにナイル川とそこを走る船は、エジプトの歴史を通じていつも重要なものだったということが、ごくごく簡単ですが確認できたと思います。

□西方砂漠の岩絵

それでは次にナイル川を離れまして、西方砂漠のほうに目を転じてみたいと思います。もうひとつわかりにくいかなと思いますが、追加してきた図があります。このあたりを見ていきたいと思います。数万年前からですね、ちょうど紀元前5000年から岩絵というものがある、福井先生がタッシリ砂漠のきれいな岩絵を写されましたが、あれと同じような色合いのものが、西方砂漠の各地で発見されております。牛、象、キリンなどの動物だけでなく、こういう船とかも発見されています。特にカルガ・オアシス周辺に点在しています、ダフラ・オアシス、ファラフラ・オアシス、そういうオアシスの周辺においてこのような岩絵が非常に顕著に見られます。

このように西方砂漠に住んでいた人たちは、自分たちの考えやあるいは何らかの意思表示のために、砂漠にある岩の表面に、赤い土とか、黄色い土とか、黒い炭とかで絵を描いたり、あるいは石の表面をさらに硬い石で削って岩絵を描いたわけです。彼らが好んで描いた主題は人間と牛を中心とする、自分たちの身の回りの動物だったようです。狩りでは狩りの成功を祈ったり、あるいは成功後の記念のために岩絵を描いたのかもしれない。あるいは狩猟の途中で砂漠の中で道に迷うのをさけるために、岩絵を目印として残したのかもしれない。またさらに西方のリビアとオアシス地域との関係とは、単に獲物を狩猟する場と人の居

住地という関係以上の、今の僕らに全く理解できそうもないものだったかも知れません。

このような状況のなか、われわれが現在調査しているカルガ・オアシスという地域の立場とはどんなものだったか。まずは先ほど言いましたことと同じ機能、つまり狩猟場に対する人の居住地というものをカルガ・オアシスも当然持っていたわけです。

□カルガ・オアシスの遺跡

それでは次にカルガ・オアシスについてそれ以外の側面、特に歴史的な情報を現時点で確認できる限りですが、少し見ていきたいと思います。というのも、このあたりはあまり調査されてなくてですね、ほとんど調査報告書が出てなくて非常に苦勞を今しているわけです。

カルガ・オアシスというのは紀元前6世紀頃、古代エジプトで言いますと第26王朝という王朝になります。そこにプサムテク2世という王様がいましたが、彼が建設をはじめたと考えられるこの神殿がそうなんです。これがヒビス神殿と呼ばれるものです。プサムテク2世の後にペルシアの王様ダレイオス1世がやってきて、それに再度改修を加えたと言われる大きな神殿であります。今でも結構いい感じでリストラクションがかなりされており、復元されてよく残っています。カイロからバスで10時間かかりますが、そんなところにも古代エジプトの神殿があるわけです。きれいでしょう。

このヒビス神殿を中心としまして、現在三つの遺跡が知られています。そのひとつが今から見えますが、カスル・グエイダといわれる遺跡です。こんな感じ。ちょっと逆光ですが、中には神殿が残ってます。いくつか改修されてますが、かなりいい感じで残ってます。小高い丘の上にある神殿であります。先ほどの最初の映像でも分かったと思います。けっこう残ってるでしょう。ほとんどほったらかしですが、紀元前3世紀頃のプトレマイオス3世という王様によってこの丘の上に建てられました。ルクソール、昔のテーベにはアムン神、ムトゥ神、コンス神を祀ってまして、ここでも同じものが祀られていました。

もうひとつがナドゥーラと呼ばれる名前の遺跡であります。ナドゥーラはどういう意味かという

まず「監視所」，「監視する場所」という意味を持っていました。非常に見晴らしのよい小高い丘の上にぽつんとあります。実は第一次大戦でちょっと使用されて、その後基地となったみたいで、かなり激しく破損されています。そのあと教会に使われたりしまして状態がよくないのですが、ここには二つの神殿と小規模な住居跡が残っております。そのうちの一つ、今一番大きく見えているところなのですが、これはですね、360度周りを見渡せるように丘の頂上にあるというわけです。画像ではなんかこんな感じですが、あんまり状態はよくないんです。

この神殿にはローマ皇帝アントニヌス・ピウスのカルトゥーシュがあります。これは古代エジプトの神様、ラー・ホルアクティーという神様に対して造られた神殿であります。こういう丘の上に造られた神殿を中心に形成されましたカスル・グエイダと、今映っているナドゥーラという二つの遺跡は、実はイスラム期に入ってでさえも交易の重要な仲介地点として使用されました。特に隊商キャラバン、ラクダの商人ですが、彼らの安全を守る監視所として使用されていたことが知られています。つまりカルガ・オアシスとその周辺の遺跡の役割は、ナイル川と他の地域、例えば南ヌビア、さらに西にいったリビア等を結ぶ役割を果たしてまして、西方砂漠の交易の安全を図るためであったというわけです。

そして三つ目の遺跡は、現在われわれが調査を行なっているアルザイヤン遺跡であります。正面から見るとこんな感じです。はじめのヒビス神殿というカルガ・オアシスの街の中心にある神殿から27キロメートルほど南にいったところにあるのがこの遺跡です。ほとんど観光客は来ません。入場料という看板はあるのですが、誰が徴収するのか分からないような遺跡です。この神殿を中心とする街は古代エジプトでは巨大な井戸という意味を持ってたと伝わってます。ギリシャ語ではトゥコネミュリスというふうに使われていたそうです。まだはっきりしたことは分かりません。非常に古くからこの遺跡の存在は知られていたんですが、神殿周辺も含めまして、それ以外の場所もほとんど未発掘という状況になっております。当然欧米、日本も含めて各国の調査隊はナイル川の近くを発掘したいわけです。ですからそれ以外はほ

ったらかしにしてきたわけです。そういうわけで未発掘の状況になっているわけです。

この神殿は日干し煉瓦製の外壁と砂岩でできた内部によって基本的に成り立っています。入り口の門はきれいな砂岩で、外側にはおそらくローマ時代の日干し煉瓦で造られた構築物が残っています。なかなかよく残ってるでしょう。そして中に入るとこんな感じです。期待は全然してなかったんですが、思ったよりやりがいのある場所であることが分かりました。こういうレリーフがあったりしました。そして中庭ですが、その奥に入りますと、一番奥に聖なる場所、こんな感じの入り口がありました。上に碑文がありました。ここがちょうど神様の像を置いたりする場所なわけです。こういう構造となっています。そしてここもアムン、ムウト、コンスという三つの神様にさげられた神殿であると考えられます。

19世紀後半にドイツの地理学者によりまして、ちょっとだけ調査がなされました。その際はガラス片、コインとかがでましたがその程度でした。だからほったらかしにされたんですが、1984年に入りまして、そこから2年間エジプト政府が改修を行ないます。その際に神殿の中から巨大な陶器を焼く窯跡、水をためる貯水槽、そしてそこからローマ時代のコインが大量に発見されました。ただまた、その後ほったらかしになりました。再度調査が入ったのは数年前で、エジプトの考古局が調査を行ないましたが、大して成果はなかったようです。ですからまだまだチャンスがあるようです。

もうひとつは神殿もそうなんですが、どうもこの近くにまだ未確認ですが共同墓地、つまりお墓がたくさんあることになっております。まだ確認していません。いつの時代のものか分かりませんが、イスラム時代でないことを祈りますが、おそらくローマ時代のものだと思います。街の中心でありますこの神殿自体は、プトレマイオス朝時代に造られまして、紀元前540年、当時のローマ皇帝アントニヌス・ピウスの治世に増改築なされた、そういう形跡が残っています。そのことがなぜ分かるのかといいますと、碑文が残っているわけです。エジプトなのですが、ギリシャ文字で書いてあります。どう書いてあるかといいますとトゥコネミュリス、この町のことで、「トゥコネミュリ

スの偉大なる神、アメネビス神および他の神々たちへわが君主なるアントニヌス・カエサルとカエサルの一族の永遠なる保護のために」と書いてあるわけです。

その後神殿の入り口は、エジプト総督アヴィディウス・ヘリオドラスの指揮の下で、総司令官セプティミウス・マクロム、軍司令官パエニウス・カエピオンとともに皇帝カエサル・ティトゥス・アドリアヌス・アントニヌス・アウグストゥス・ピウス、長いですね、たくさん名前が挙げられています。その治世3年に修復と建て替えがなされたと書かれています。僕のギリシャ語が正しければそう書いてあります。そのぐらいの意味しか残っていません。

このアル・ザイヤン遺跡もまた中継交易の重要な仲介地点として、あるいは人々の安全を保障する避難場所として使用されたと考えられるわけです。現時点としてはこのアル・ザイヤン遺跡をめぐる情報は残念ながらこの程度で、歴史的なことが非常に少ないことがわかります。来年以降の調査の成果を期待しています。

□カルガ・オアシスの繁栄

それでは最後にアル・ザイヤン遺跡を含むカルガ・オアシスがなぜ繁栄したのか、この問題についてこれから、私個人の研究の展望について少し触れておきたいと思います。

カルガ・オアシスが繁栄した理由にはいくつかの点が挙げられます。そのひとつがカルガ・オアシスからみました東方のナイル川との関係です。カルガ・オアシスを地理的に地図から見てみましょう。これは非常にきれいな図ですが、どこかの研究書からとってきたわけではなく、これは『地球の歩き方』という旅行ガイドからとってきたものです。このガイドは私も書いているのでよく使います。なかなか研究書は売れないのですが、ガイドは売れるのです。エジプトの調査に行きますと、あるいは飛行機に乗ってますと、横の女の子とかみんな『地球の歩き方』ガイドを見てるんです。でも印税は入ってこないんです。残念ながら。印税契約してれば、と今は後悔しています。何万冊も売れてるわけですから。そういう意味で使えますが、この地図から何が分かるかといいますと、カルガ・オアシスはここにあるわけで、ナイ

ル川に近いということが特徴に挙げられます。

このナイル川沿岸の都市でありますナカダとエドフという古代の巨大な都市がこのカルガ・オアシスと平行してナイル川沿いにあったということがわかると思います。また、もうひとつここに載ってませんが、エスナとアスユート、ここの近くですが、ここも巨大な都市であったようですが、そこへ通じる大きなルートでもあったということも重要な点でした。要するにカルガ・オアシスは、ナイル川沿いの巨大な都市に近かったということです。直接通ずる道がちゃんと常備されていたということが一つ目の理由だと考えられます。

二つ目は西方のリビアの方、あるいはカルガ・オアシスからリビアへ向かう途中に存在します、他のオアシスとの関係です。カルガ・オアシスに暮らす人々にとりまして、近くのオアシスは当然普通に考えれば長年にわたって最もなじみのある地域だったということは、想像に難くないわけです。要するにオアシス間でネットワークができていたのではないかと思います。

そして三つ目はこれは南の方にいきまして、ヌビア、つまりスーダンとの関係であります。二つ目の点とも重なりますが、カルガ・オアシスはナイル川沿いの地域とカルガ・オアシス以西のオアシスと南のヌビアとを結ぶ非常に巨大な三角ネットワークの一角に位置していたのではないかと考えています。古代エジプトではヌビアの特産物、特に金を獲得するためにエジプトとナイル川を共有していた南方のヌビアと交易を行ったり、時には武力でヌビアを侵略したという歴史を持っています。金を得るためにヌビアをコントロールすることが、エジプトの歴代国王たちの最大の目的でもあったわけです。また、後の時代には先ほども言いましたように、多くの隊商が通行するためにアスユートという町があり、そこからダクラ・オアシスを通ってさらに南に行きますとヌビアとスーダンになります。それらを結ぶ有名な道があったわけです。イスラムの時代に栄えた道なので、アラビア語で言われてますが、ダルブ・アル・アルバイーンという、40日の道といいますが、そういうルートをコントロールする拠点としてカルガ・オアシスが利用されました。ですから、カルガ・オアシスは金がある南のヌビアとナイル世界をつなぐ接続点と考えられていたわけです。

以上のような交易とかあるいは交流に非常に好都合な立地条件が、カルガ・オアシスに繁栄期をもたらしたのではないかと考えます。

□ナイル川の混乱期が、カルガ・オアシスの繁栄期

それでは最後に少し確認しておきたいのですが、紀元前3000年頃にエジプトに最初の統一王朝が成立します。そしてその後約3000年間、ナイル川を中心としてエジプトは王国として繁栄するわけです。その繁栄期の前後の時期に、例えばエジプトの最初の統一王朝出現以前の時期と、繁栄の終焉を迎えていました末期王朝といわれる時期、あるいはその後のローマ時代には、ナイル川から離れていた西方砂漠のカルガ・オアシスに、人々の痕跡が非常に顕著に見られると確認されています。先ほども少し言いました岩絵もその一つの例です。つまりエジプトで一人の絶対的な王を頂点とします国家体制が十分であった時期は逆にカルガ・オアシスは停滞期にあり、エジプトが混乱期にある時期にはカルガ・オアシスは繁栄期であった、ということになります。

かなり粗削りなところがありますが、この現象の原因は何なのか考えますと、その答えは、ナイル川流域が部分的、社会的にあるいは政治的に不安定な時期、つまり一人の絶対的な国王を頂点とする国家体制が不十分なときには、安全な航行が約束されていなかったことに一番の原因があるのではないかと思います。つまり、エジプト国内が安定した時期には船をもちいた交易路としての役割を果たしていたナイル川が、南方のヌビアの金を中心とした産物をもたらしていたわけですが、エジプト国内の混乱期にはナイル川沿岸に、複数のたくさんの地方君主が存在していたために、ナイル川を安全に使えなくなってしまったわけです。

その時、オアシス経由でヌビアの金を手に入れざるを得ないような社会状況が生み出されたのではないかと思います。そのためにこのエジプト国内、つまりナイル川沿岸地域における混乱期にのみカルガ・オアシスには人跡が見られ、その反対に人々がナイル川を安全に航行して南方のヌビアの産物を運ぶことができ、また逆にエジプトのものをヌビアに運ぶことができた、そういう時期がエジプトの繁栄期になったのではないかと思います。カルガ・オアシスを利用せずにナイル川を安全に航行できるときがエジプトの安定期だったということです。このことから古代エジプト文明にとって、ナイル川の重要性が再確認できるのではないかと思います。

□おわりに

ちょうど時間となりましたが、調査の状況を宣伝してほしいという話が調査隊の隊長からありまして、どうということかといいますと、早稲田だけじゃないということを書いてこい、というわけです。1分ほど紹介しますが、スライドを流します。初めての調査だったのですが、今年は何も出てこないと思いましたが住居跡が出てきました。窯跡や土器が出たりしました。調査はこのようにして進んでいきます。手前の機械で地表を写して、段差をとるんです。

土器を出したのは隣のサングラスのエジプト人研究者です。なかなか仲よく調査して、僕はただ見るだけです。なにか文字の書かれているものが出てこないかと思いましたが、なかなか望むものは出てこなかったです。土器ばかりで考古学の人には大喜びですが。来年以降どこかでこういう話をするかもしれません。そのときはまた、興味を持って見ていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

(おおしる・みちのり／駒澤大学専任講師)